2020 年度入学試験問題

外国人留学生

小　論　文

注　意

1. 指示があるまで，手を触れないこと。

2. 指示に従って，解答用紙に受験番号および氏名をはっきりと記入すること。

3. 解答は，解答用紙の指定された箇所に，横書きで記入すること。

4. 問題冊子は 6 ページ，解答用紙は 1 枚である。もし，問題冊子の落丁，乱丁および解答用紙の汚れなどがあれば，ただちに申し出ること。

5. 問題冊子は持ち帰ること。

外国人留学生入学試験問題

次の文章を読んで，設問に答えなさい。

1923 年の関東大震災により，東京では山の手の郊外への人口移動が起き，大阪への移動も見られた。日常的な移動に加えて，地域間の人口移動も増えていく。都市部の工業化が本格化し，農村から季節的に，さらには恒常的に多くの人々が流入する。この動きは，第二次世界大戦後に本格化し，都市への人口流入を大規模な①郊外開発が支えていく。

図 1 は，同一都道府県内での移動，都道府県を越えての移動が毎年どれだけあったかを示したものである。都道府県を越えての移動と都道府県内での移動はほぼ〔　ア　〕程度ある。

1960 年代と 70 年代には毎年増加をつづけ，(a)ピーク時には 800 万を超えた。オイルショックの頃を転機に，移動者は減少していく。1990 年代に都道府県内での移動が再び上昇を見せたことを除き，〔　イ　〕つづいている。それでも 2018 年現在でも，毎年 500 万人ほどの移動がある。単純にいえば，平均して 25 年に一度程度は誰もが移動する計算になる。

現在の都市型社会では，居住地と通勤・通学先が異なることは一般的である。それは昼間人口と夜間人口のズレという形になって現れる。昼間人口が多い街は，産業や教育機関が集積し，周辺から多くの通勤・通学者を集めている街である。逆に夜間人口が多い街は，いわゆる(b)ベッドタウンである。

現在の日本の都市の状態を見てみよう。**図 2** は，2015 年の国勢調査結果に基づいて，人口 45 万人以上の市について，夜間人口を横軸，昼夜間人口比を縦軸にとったものである。昼間人口はその地に通勤・通学している人数を加え，夜間人口のうち他の都市に通勤・通学している人数を引いたものである。観光や②商談でそこを訪れる人は数えられていないので，実態のすべてを把握できるわけではないが，およその傾向を捉えるには十分である。

図 2 に基づくと，都市は大きく四つの類型に分けられる。

第一は東京と大阪である。昼夜間人口比が 1.3 前後であり，つまり昼間人口は 30%

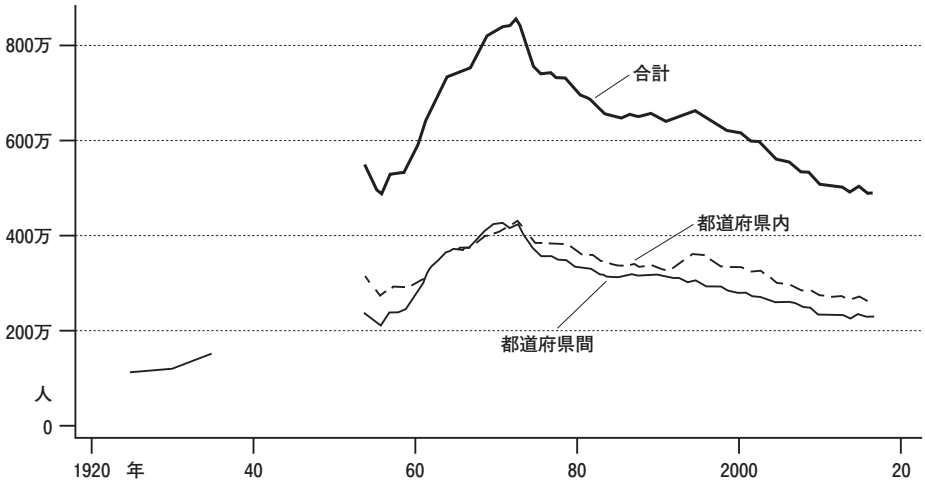
程度多い。周辺地域から多くの通勤・通学者を集める経済中枢である。ただし絶対規模では，東京は大阪の 3 倍であり，その違いは大きい。

第二は，昼夜間人口比が 1.05 を超えるもので，〔　ウ　〕と福岡を筆頭に，京都，仙台，金沢があてはまる。京都を除いて広域経済圏の中心都市である。

第三は，札幌，神戸，広島，千葉など昼夜間人口比が 1 前後の都市である。札幌や広島のように，都市自体が③産業集積を備え，住民の雇用を吸収している完結型の場合と，神戸や千葉のように，周辺部から多くの通勤・通学者を集めつつ，大阪や東京への通勤・通学者も多く存在している場合の双方がここには含まれる。

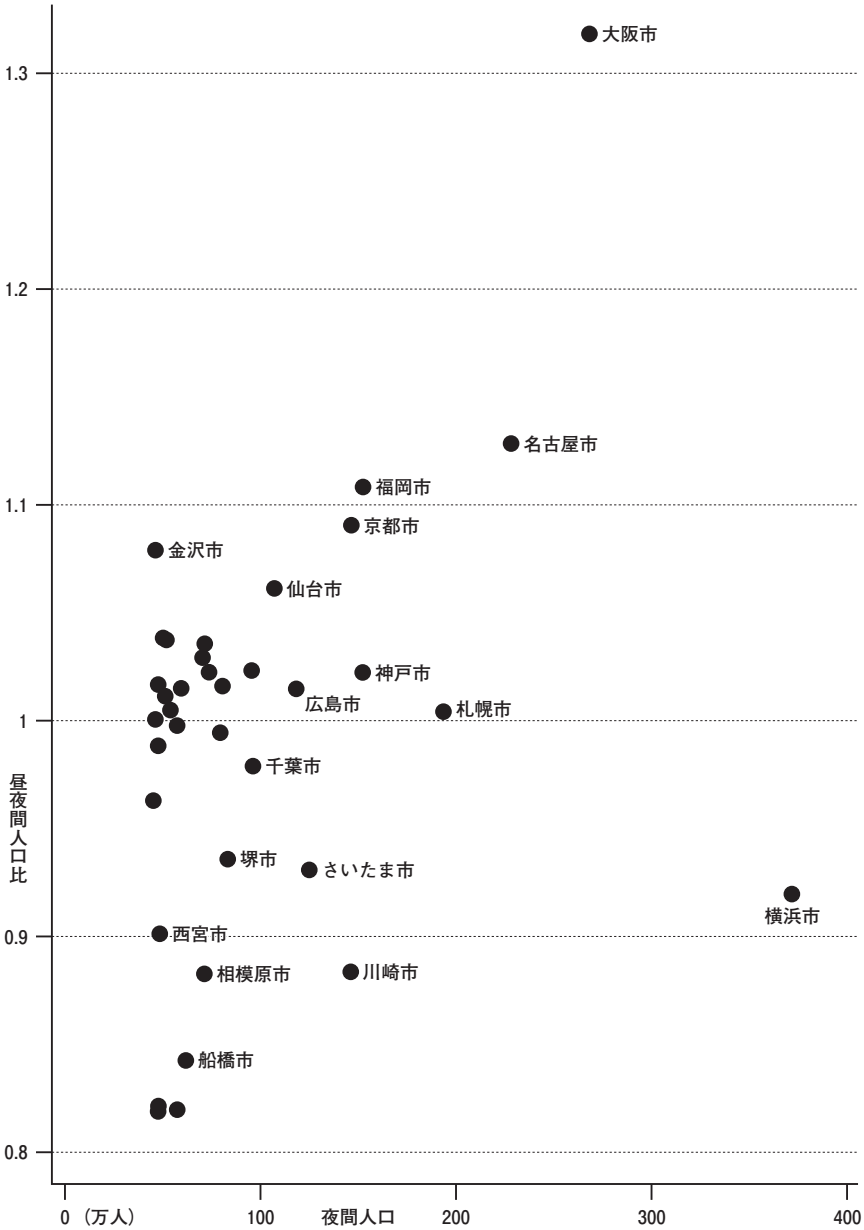
第四は，昼夜間人口比が 0.95 を下回る都市である。横浜を筆頭に，さいたま，川崎，相模原，船橋（ふなばし），堺，西宮である。いずれも東京，大阪周辺のベッドタウンの性格が強く，日本の市町村には，こうした性格を持つものが多い。

図 1　移動者数の変化



註記：1935 年までは道府県の 5 年ごとの社会増減のうち増加分をすべて合計した値。1954 年以降は各年の移動者数。
出典：1935 年までは総務省統計局『日本の長期統計系列』，1954 年以降は『住民基本台帳人口移動報告 長期時系列表』より筆者作成

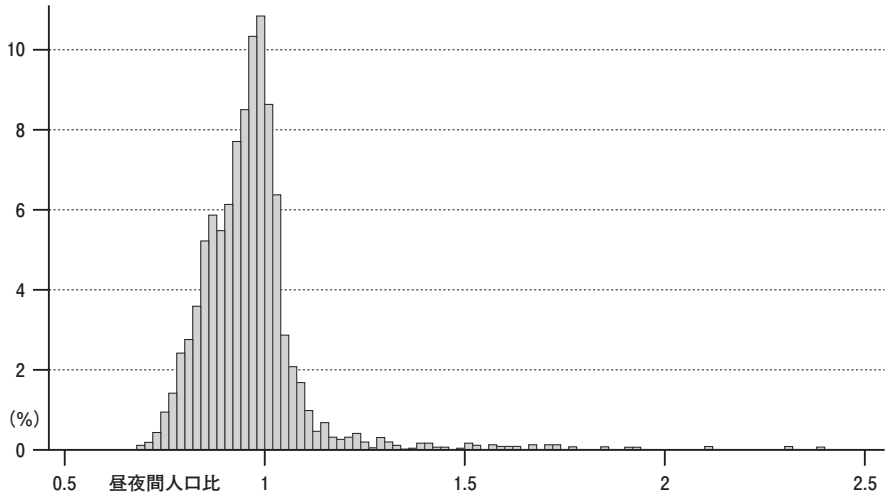
図２　夜間人口と昼夜間人口比



註記：＊１）東京 23 区は夜間人口 972.27万人，昼夜間人口比率 1.298。
＊２）地名を付していない都市は，昼夜間人口比 1 付近のものとして，東大阪，宇都宮，岡山，静岡，北九州，熊本，大分，新潟，鹿児島，松山，姫路，福山，八王子，浜松，倉敷，尼崎。昼夜間人口比 0.8 付近のものとして，市川，松戸，川口。

出典：平成 27 年度国勢調査に基づき筆者作成

図 3　昼夜間人口比の分布



註記：＊1）ヒストグラムの幅は 0.02。そこに該当する市町村の数が全体に占める割合を縦軸に示している。
＊2）昼夜間人口比が 2.5 を超える市区町村は図から省略した。該当するのは，東京都千代田区，港区，大阪市中央区，北区，名古屋市中区，愛知県飛島村，福島県飯舘村，葛尾村，楢葉町である。
出典：平成 27 年度国勢調査に基づき筆者作成

図 3 は，すべての市区町村の昼夜間人口比について，その頻度を示したものである。一番高い峰は 1 であるが，それよりも低い値の方に，多くの市町村が位置していることがわかる。日本全体として見ると，限られた数の集積地が存在し，そこへの通勤・通学者が多く居住する市が周辺に多く存在している。

昼夜間人口のズレは，つぎのような問題を引き起こす。昼間人口が大きな中心都市は，住民以外の通勤・通学者への行政(c)サービスを提供するが，その原資を獲得することが難しい。昼間人口の増大は，企業や高等教育機関が存在するためだが，これらへの④課税権が十分になければ，昼間人口に提供する行政サービスを⑤賄うことができない。

別の言い方をすれば，中心都市が提供する行政サービスは，周辺の市町村へも拡散する。これをスピル・オーバーという。スピル・オーバーするサービスのための負担を周辺市町村に求めることができなければ，スピル・オーバーは中心都市の超過負担を招く。逆に，夜間人口の方が多いベッドタウンでは，自己の住む地域に対する関心

が低くなる可能性が高い。このため，地域の政治や行政への参加を期待することが難しくなる。

【出典】曽我謙悟『日本の地方政府』（中央公論新社，2019 年）
※設問作成にあたり，一部を加工しました。

設問 1　①～⑤の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

設問 2　(a)～(c)の意味を簡潔に説明しなさい。

設問 3　〔　ア　〕～〔　ウ　〕をそれぞれ 3 文字以内で埋めなさい。

設問 4　図 3 で，昼夜間人口比が 1 を下回る市町村のほうが，1 を上回る市町村より多い理由を 50 字以内で説明しなさい。

設問 5　スピル・オーバーするサービスとはどのようなものか，具体例を一つ挙げながら 50 字以内で説明しなさい。

設問 6　昼夜間人口のズレが引き起こす問題について，あなたの国の事例を踏まえて 400 字以内で対策案を書きなさい。